

(第六章)

法の無我を説く>それに我が有る理由を否定する>依拠するものである全くの煩惱が有ることを否定する>

[章の著述を説く]

ここに言う。「君が蘊と界と處の空性を（教法に）従って良く示したので、吾輩は空性について聴聞をしたくなかったが、それ故に、ここでは貪欲と欲す者が考察されるに適する。」

説く。そのようにしよう。

言う。「ここで、それやそれに貪欲と、欲す者は捨て去られたと示された。貪欲を熄滅させる為に、正理もまた示された。（それらが）無ければ、熄滅させる正理をも示したことは不適であり、このように、毒蛇が害さなければ真言と薬の働きは無い。そう見るので、貪欲と欲す者は有る。」

章の著述を説く>貪欲と欲す者が本性として有ることを否定する>前後して起こることを否定する>

[貪欲の以前に欲す者の有無を否定する]

説く。貪欲と欲す者はあり得ない。如何様にといえば、

もし貪欲の以前に、
貪欲の無い、欲す者が有るならば、
それに依拠して貪欲が有る。
欲す者が有れば、貪欲は有ることになる。 1

もし、貪欲の以前に、貪欲の無い、貪欲より別他となった欲す者が何か有るならば、それに依拠して貪欲が有るとなるだろう。何故かといえば、

「欲す者が有れば、貪欲が有ることになる。」

このように、欲す者が有れば、貪欲も「これだ。」と合理になるだろう。欲す者が無ければ、それは誰の貪欲になろうか—このように、拠所無いものに貪欲は不合理であるので、それ故に、欲す者が無ければ貪欲は不合理である。

言う。「欲す者が有れば、貪欲は有る。」

ここに説く。

欲す者が有るとなろうとも、
貪欲が有ると、何処でなろうか。

君の欲す者が有るとなったとしても、貪欲がまさしく有ると何処でなろうか—このように、欲す者に対して貪欲の働きは何もない。欲す者にしなければ、如何様に貪欲であるとなろうか。どうしてもなるならば、何もまさしく貪欲ではないものにならないので、それは主張せず、それ故に、欲す者が有るとなったとしても、貪欲は不合理である。

前後して起こることを否定する> [欲す者の以前に貪欲の有無を否定する]

言う。「先ず、欲す者は有る。それも貪欲が無ければ現れないので、貪欲もまさしく良く成立したのである。」

説く。

欲す者についても、貪欲が、
有るか、無いかも、次第は等しい。 2

欲す者が有るかとは尽く考察したならば、貪欲が有ろうとも無かろうとも—欲す者についても貪欲が不合理であるまさしくそれと、次第は等しい。如何様にといえば、

「もし欲す者の以前に、欲す者の無い、貪欲が有るならば、それに依拠して欲す者が有る。貪欲が有れば、欲す者が有ることになる。」¹

もし、欲す者の以前に、欲す者より別他となる、欲す者の無い貪欲が何か有るならば、それに依拠して欲す者が有ることになるだろう。何故かといえば、

「貪欲が有れば、欲す者が有ることになる。」

このように、貪欲が有れば欲す者も「これによって、この者は欲す。」という合理になるだろう。貪欲が無ければ、何によってそれが欲す者になろうか。欲していなければ、如何様に欲す者となろうか。もし(欲していなくとも欲す者に)なるならば、何ものも、まさしく欲す者でないとはならないので、それは主張しない。それ故に、貪欲が無ければ欲す者は不合理である。

そこで、こう『貪欲が有れば欲す者が有る』と思えば。

説く。

「貪欲が有るとなろうとも、欲す者が有ると、何処でなろうか。」²

¹ 「もし…になる。」:『根本中論』第6章 1偈の言葉を変換する。

君の貪欲が有るとなろうとも、欲す者がまさしく有る³と、何処でなろうか—このように、もし貪欲が有れば欲す者となるならば、その欲す者は、その貪欲によって欲す者になったのではない。欲す者でなければ、如何様に欲すとなろうか。もし（欲す者でなくとも欲すと）なるならば、如何なる時もまさしく欲す者でないとはならないので、それは主張せず、

「貪欲についても、欲す者が、有るか、無いかも、次第は等しい。」⁴
それ故に、貪欲が有るとなったとしても、欲す者は不合理である。

その正理を他にも適用する> [一緒（同時）に起こることを否定する]

言う。「貪欲と欲す者の二つには前後関係は無く、このように、その二つはまさしく一緒（同時）に生じるのである。」

一緒（同時）に起こることを否定する> [相互関係が無いので、一緒であることを否定する]

説く。

貪欲と欲す者が、
まさしく一緒に生じるとは正理ではない。

貪欲と欲す者は、まさしく一緒に生じることは不合理である。何故かといえ
ば、

このように、貪欲と欲す者は、
相互関係が無くなるだろう。 3

このように、もし貪欲と欲す者がまさしく一緒に生じるとなれば、貪欲と欲す者は互いに相互関係が無くなるだろう。そのようになれば、「この者の貪欲とはこれである。」「これによってこの者は欲する。」というそれらは不合理である。それらが無ければ、貪欲はまさしく不合理であるが、欲す者もまさしく不合理である—このように、貪欲とは欲すとするものであるが、欲す者は欲すとされるものである。しかし、まさしく一緒に生じた相互関係が無いものに、それらは不合理であるので、それ故に、貪欲と欲す者がまさしく一緒に生じることも正理ではない。

² 「貪欲が…なろうか。」：『根本中論』第6章2偈の言葉を変換する。

³ 有る：北京版、ナルタン版を基に訳した。

⁴ 「貪欲…等しい。」：『根本中論』第6章2偈の言葉を変換する。

一緒（同時）に起こることを否定する>同一と別において、一緒であることを否定する>

[同一と別において、一緒であることを一般的に否定する]

また他にも、君達の誰かが「何かはまさしく一緒である。」というそれら貪欲と欲す者は、まさしく同一か？まさしく別となるのか？と問えば、
そこで、

まさしく同一であるものは、まさしく一緒には無く、

先ず、同一そのものであれば、まさしく一緒であることは不合理である。何故かといえば、

まさしくそれは、それと一緒ではない。

ここで「黄牛だけ」というものは、そのまさしく同一であるものが一頭の黄牛に当てはまる。そこで、たった一頭の黄牛自体が、一頭だけの黄牛そのものと、如何様と一緒にとなろうか。それ故に、まさしく単一であるならば、まさしく一緒とは不合理である。

言う。「ならば、別そのものであれば、まさしく一緒になるだろう。」

説く。

もし、別そのものであるならば、
一緒であると、如何様になろうか。 4

もし、同一そのものであるとしても、まさしく一緒であることは不合理であるならば、別そのものであれば、まさしく一緒であると如何様になろうか。このように別性の不合致の方向とは、まさしく一緒であるならば、不合致であるその二つは、一つ（の拠所）に如何様と一緒に留まるとなろうか。それ故に、別そのものであるとしても、一緒（同時）性は不合理である。

『仮に不合理であろうとも、貪欲と欲す者に一緒（同時）性は有る。』と考えれば。

それについても説こう。

もし、一つだけが一緒であるならば、
友が無くともそうなるだろう。
もし、別のものが一緒であるならば、
友が無くともそうなるだろう。 5

もし先ず、貪欲と欲す者がまさしく同一であるとしても、まさしく一緒になるならば、そう見れば友（相対するもの）が無くともまさしく一緒となるだろう。如何様にといえば、ここで「一」とは単一に当たる。そこで「一頭の黄牛」「一頭の馬」という単一性は、黄牛にも馬にも当てはまるので、それぞれに単一性が有るそれやそれと一緒に（同時）性が有り、まさしく単独の黄牛や、まさしく単独の馬において、友が無くとも一緒（同時）性が有る背理となる。そう見れば、まさしく一緒であると考察されることは無意味になるだろう。

もしまた、まさしく別であるけれども、まさしく一緒であるとなるならば、そう見るとしても、友が無いとしてもまさしく一緒であるとなるだろう。如何様にといえば、ここで、黄牛からも馬は別であるが、馬からも黄牛は別であるので、それぞれにまさしく別であるそれとそれと一緒に（同時）性が有り、まさしく別の黄牛とまさしく別の馬において、友が無くとも一緒（同時）性が有る背理となるだろう。そう見るとしても、まさしく一緒であると考察されることは無意味になるだろう。

同一と別において、一緒であることを否定する>別において、一緒であることを特別に否定する>

[別として成立していないので、一緒は成立しない]

言う。「別性とは、黄牛に有るのでもないが、馬に有るのでもないけれど、一緒に起こったその二つともに有るので、それは双方の総体の結果であり、会合の如くである。もし、別性がそれぞれに有るとなれば、別性が二つになることと、事物は相互関係せず各々にも有ることになるので、その意味は主張しない。それ故に、別性とは、一緒に起こった二つともに有る。」

説く。

もし、別が一緒であるならば、
貪欲と欲す者は何であろうか。
別そのものとして成立したとなれば、
然れば、その二つは一緒となる。 6

別性が二つともに有ることは主張し得る。もし、二つともに有る別性において、まさしく一緒であると考察するならば、そのようであれば貪欲と欲す者について、何が良く論証されるのか。ある時、そのようにも考えれば、その二つはまさしく別として成立したのみとなるだろう。然れば、まさしく別として良く成立した故に、その二つはまさしく一緒であると考察することになる。

別において、一緒であることを特別に否定する> [別として成立したならば、一緒は必要性が無い]

もし、貪欲と欲す者が、
まさしく別として成立したならば、
それらはまさしく一緒であると、
何故、尽く考えるのか。 7

「まさしく」という言葉は、「のみに」という意味である。

もし『貪欲と欲す者は別の事物としてまさしく成立した』とこう思えば、その二つにおいて、「別の事物」と不一致であるその「一緒の事物」、無いものについて何故尽く考えるのか。ある時、別の事物として成立したならば、一緒の事物であると考察されたとしても、貪欲と欲す者は消え失せるか、(それらに)当たるとなるものは僅かにも無い。このように、欲す者に対して貪欲も何をすることがあろうか。そう見るので、一緒の事物であると既に考察されたとしても、まさしく別である過失となるのみである故に、一緒の事物であると考察したことは無意味となり、既述に水を撒くが如くである。

別において、一緒であることを特別に否定する>

[別が「一緒」に対応するならば、相互依存すると示す]

別として成立したとならないので、
それ故に、一緒を主張するのか。
一緒が良く論証せられる為に、
まさしく別であると、再び主張するのか。 8

貪欲と欲す者がまさしく別であるとは、必要性が無い故に成立したとならない。従って、それが良く論証せられる為にまさしく一緒であると主張するのである。しかし、まさしく一緒であるとしても、まさしく同じ過失となる故に成立していないので、それが良く論証せられる為にも「別性である」とも主張する君は、まるでボロ服を強風にあおられて縮こまって居り、縮まっていること

が知られることを耐えられず、また体を伸ばすに似ている。

別の事物は成立していないので、
 一緒の事物は成立しないだろう。
 別の事物である何を、
 一緒の事物であると主張するのか。 9

ここでそれぞれにおいて、別の事物が有るのか？一緒に起こるその二つに（別の事物が）有るのか？と問えば、別になった貪欲と欲す者においては、「これは貪欲である。」「この者は、これによって欲す。」というようなことは、一切の様相においてあり得ない。別の事物として良く成立したことが無ければ、一緒の事物が成立するとはならない。

このように君は、別の事物が有れば、その二つの一緒の事物が有ると主張するけれど、その別の事物も一切の様相において成立しない。別の事物が無ければ、君のいう一緒である事物が有ると、何処でなろうか。

ならば、別の事物である何かの有れば、貪欲と欲す者は一緒の事物であると主張される、何かそれぞれに有るものか、あるいは一緒に起こった双方に有るのか、あるいは君が独立した別の事物を他に何か考察してもよいが、別である何かの有るなら、貪欲と欲す者は一緒の事物であると主張する、それを言いたまえ。

章の著述を説く > [諸批判のまとめと、その正理を他にも適用する]

そのように、貪欲と欲す者は、
 一緒であるとも、一緒でないとも成立しない。
 貪欲の如く、全ての諸法（現象）は、
 一緒であるとも、一緒でないとも成立しない。 10

「もし貪欲の以前に、貪欲の無い、欲す者が有るならば、それに依拠して貪欲が有る。欲す者が有れば、貪欲は有ることになる。」⁵
 という等、以前に過ぎたそれらの様相によって、そのように諸々の貪欲は、欲す者と一緒であるか、欲す者が無いとしても成立することは無い。

貪欲は、者と一緒か、欲す者が無いとしても成立することは無いが如く、一切法（現象）も何かと一緒か、何も無くとも成立することは無い。

⁵ 「もし…になる。」：『根本中論』第6章1偈。

ブッダパーリタ [第6章]

依拠するものである全くの煩悩が有ることを否定する> [章の名を示す]

「食欲と欲す者を考察する」という第六章である。

DECHEN 訳